百人一首を覚えよう！　その４（３１～４０）

３１．朝ぼらけ　有明の月と　見るまでに　吉野の里に　降れる白雪
（あさぼらけ　ありあけのつきと　みるまでに　よしののさとに　ふれるしらゆき）

（坂上是則（さかのうえのこれのり）　蹴鞠（けまり）の名手）「古今集」

３２．山川に　風のかけたる　しがらみは　流れもあへぬ　紅葉なりけり
（やまがはに　かぜのかけたる　しがらみは　ながれもあへぬ　もみぢなりけり）

（春道列樹（はるみちのつらき）（ ～ 920））　「古今集」

３３．久方の　光のどけき　春の日に　しづ心なく　花の散るらむ
（ひさかたの　ひかりのどけき　はるのひに　しづこころなく　はなのちるらむ）

（紀友則（きのとものり）（ ～ 905 頃）＝ 古今集の選者の一人）「古今集」

３４．誰をかも　知る人にせむ　高砂の　松も昔の　友ならなくに
（たれをかも　しるひとにせむ　たかさごの　まつもむかしの　ともならなくに）

（藤原興風（ふじわらのおきかぜ）　琴の名手）　「古今集」

３５．人はいさ　心も知らず　古里は　花ぞ昔の　香ににほひける
（ひとはいさ　こころもしらず　ふるさとは　はなぞむかしの　かににほひける）

（紀貫之（きのつらゆき）（868 頃～ 946）
＝「土佐日記」の作者。古今集の選者の一人）「古今集」

３６．夏の夜は　まだ宵ながら　明けぬるを　雲のいづくに　月宿るらむ
（なつのよは　まだよひながら　あけぬるを　くものいづくに　つきやどるらむ）

（清原深養父（きよはらのふかやぶ）＝「日本書記」編者の
舎人親王（とねりしんのう）の子孫）　「古今集」

３７．白露に　風の吹きしく　秋の野は　つらぬきとめぬ　玉ぞ散りける
（しらつゆに　かぜのふきしく　あきののは　つらぬきとめぬ　たまぞちりける）

（文屋朝康（ふんやのあさやす）＝ 文屋康秀（№２２）の子）　「古今集」

３８．忘らるる　身をば思はず　誓ひてし　人の命の　惜しくもあるかな
（わすらるる　みをばおもはず　ちかひてし　ひとのいのちの　おしくもあるかな）

（右近（うこん）　女流歌人）「拾遺集」

３９．浅茅生の　小野の篠原　忍ぶれど　あまりてなどか　人の恋しき
（あさぢふの　をののしのはら　しのぶれど　あまりてなどか　ひとのこひしき）

（参議等（さんぎひとし）（880 ～ 951）　源希（まれ）の次男）　「後撰集」

４０．忍ぶれど　色に出でにけり　我が恋は　物や思ふと　人の問ふまで
（しのぶれど　いろにいでにけり　わがこひは　ものやおもふと　ひとのとふまで）

（平兼盛（たいらのかねもり）（ ～ 990）　村上天皇の歌合せ会での優勝者）「拾遺集」